きょうのランチあしたのランチ

群　青

アリスは八十歳

うとうとしていると車いすから放り出され
しだにおおわれた深い穴に落ち込んだ
あたまから転がっていく
足から草の中に滑り落ちて
明るい野原を駆けだした
わあい走れるんだ
いたちやはくびしんがついてくる
白い馬肥しの花
よつばやみつばのパラシュート
遠賀平野から
慶州南道
済州島

杭州から
カシミールのあぜ道こえて
南へタミール
飛んで
カザフスタン
あれはウクライナの野原
ガザの白兵戦に紛れ込んだ
銃剣で刺しあうなんて
もうそんなことはなくなったでしょう
いやいや
ご老人そんなこたない
これが戦争の基本
ガラガラ声のコウノトリたちが笑う
子供を運ぶなんてむなしいもんさ
うああうああと濁り声
あんた動きはまだまだいいぞ
一緒にやんなよ
いやいや
聞かないふりして
お尻から離れるアリス
なんでもない日がなくなって
一年中が祝祭日
乾杯も急ぐこたない

眠ろう
太りすぎウサギの大あくびの沼で
ウナギが挨拶
ようようアリス
背伸びしすぎはいかん
地球をけっとばすぞ

ひげ面のイスラム男の一群が
乾いた土を探している
墓には湿りが多すぎる
砂漠が恋しい

大きな鏡の中で
福沢くんがルイスくんと口論している
わけわからんこというんじゃない諭吉君
東洋は東洋
おかしな学問を勧めてはいけない
なんとなんと諭吉くんが声を荒げる
なんといっても
きみたち白人は世界を独り占めする
欲が過ぎる

アリスが割って入る

何世紀たってもつまらない理屈
金持ちのいいとこのぼんたちはしょうがないね

これからなのです
文明の扉がひらかれるのは
金にまつわらない
権力に頼らない
殺さない殺されない
狭き門なんてない
門なんていらない
広々と
両手ぶらぶら
八十歳のアリスが通る
手錠をかける？
首に縄を巻き付ける？
できるかな
アリスが通る
ところできょうのランチはなんだろう
あしたのランチは？

みんなのほそみち

ここのほそみち勤務の終わり
二十メータを行ったり来たり
猿田彦さんから銀座商店街まで
荷台を付けた自転車が通る
酒瓶を抱えた速足の男が通る
スニーカーが通る
革靴やヒールは来ない
スーツのバックパッカーが通る
食事に向かう暗い色の男女が通る
間をおいて通る
アーケードが暮れていく
一軒だけのカフェの木の椅子に座る
一軒だけの洋装店はシモーヌ
シャッターを降ろそうとして
おおシモーヌ飛び上がる
踊れシモーヌタイルを蹴って
シモーヌは神出鬼没
値札の代わりに反戦札だ
ここのほそみち下は廃坑

疲れが通る
大笑いが通る
いつものところに帰る道
もうすぐ月も星も見えなくなるぞ

力を込めて腰を上げる
そよぐ柔毛や若い血とにおいなんかを
待ってたが
とぼとぼ歩き出す

おおお両側から水が来て通る
ぶつかり合う
有機栽培のメロンが通る
雑穀米が通る
壜詰めの日本はちみつが通る
高値の卵や葉っぱが通る
豚バラと鳥皮が通る
宅配便が通る
薬局の白衣が通る
ベッドにつながれた腕が通る
点滴セットが通る
水がアーケードの天井にまで迫る
首だけ出ている男好き女好きどっちも好き

沈みかけの作業服の背中の文字は相互扶助
泥まみれの法衣
市会議員区会議員が流される
パトカーが浮かぶ
県会議員国会議員大臣首相はいない
至上もいない
組合旗が立往生
戦車も兵士も来ない
近所の知り合いが泳いでいる
国が雨のように降って流れ去る
シモーヌと目で話し合う
まだ遅くない　今だからいうよ
気に入っているんだシモーヌ
あすランチしよう
でももう何もかもいあやね
シモーヌがこたえる
だれかの口笛が聞こえる

音

井戸からくみ上げ毎朝飲む

水
男
血を飲むと真っ赤な血のような愉快な笑いが出るといったロシア人がいた
女があきれる
男ってそんなもんなん
大げさな
血は毎月のことよ

音が遠い
聞こえるのは体の生きている音
ときどき何かが裂ける音
女たちは音もなく血を流す
事件でも
戦争でもなく

血の音きこえてる？
悲しみのお出産でなかった日があったと思う？
いのちなのに　新しいいのちなのに
あははと女の笑い

男が立ちすくむ

灰になるのはごめん

焼かれないぞ
焼き場の煙にならない
病院に捨ててもいい
施設に放り込んでもいい
だが骨粉にするのはやめてくれ

とりついてやる連中の名簿もつくったんだから
土葬の群落がいい

さてさて十人の国会議員がいなくなった
だれのせいかは知らない
一人目は先輩の大葬儀会場で毒を盛られた
二人目は執務中餅菓子を喉につめた
三人目は広島を出たとたん新幹線のなかで食中毒
四人目は暑すぎる園遊会の四阿で脳梗塞
五人目はカードの紐が首に絡まって窒息
六人目は高速道路で眠り込んだ
七人目は専用機が燃料切れで墜落
八人目は埋め立て用土砂をかぶってつぶされた
九人目は汚染水一杯で数年後中毒死

十人目は無罪を主張して国会議事堂に立てこもった
その夕は雷がたて続けに落ちて近くの墓地まで飛ばされて死んだ

よちよち歩きがしゃがみこんで
小石を拾う
木の実を拾う
どんぐりが大好き
木の枝をとって振る
入れるものを欲しがる
母さんが布でつくった肩掛けポシェット
家の玄関に広げる

とりつくのもいい
広場をつくるのもいい

だるま落し

不機嫌な目を据えたまま　たまご頭は
眠る間もない怒りのひげ面
切り離され落されても転がらず

揺れながら揺れながら
叫ぶ　叫ぶ
正義の反撃だ！

光る大額の真下の腫れた瞼
強気の細目が動かない
つるつる顔の薄い唇が脅し文句をやめない
棺桶の闇でぐっすり寝た不吉顔
切り離され落とされても転がらず
出兵せよ出兵せよ
正義の出兵だ！

黒髪たっぷりに染め
うろうろする目はもっぱらご機嫌伺い
被曝者の庭を戦争をやめない人たちと歩く
戦争に勝つことが平和だと入れ歯を見せていう枯れた木を見上げて
素直にうなずく
法にもとずく正義の支援だ！
嘘つきだるまの頭

お門違い

ここじゃなかったか
あいつはこの門から入っていった
ガラス引き戸の玄関
三段のコンクリートの階段
表札はない
生きていたのか
失踪したのが十年前
垣根の道の奥に行ってしまった

ここは幽霊たちが住んでるよ
近所の男が教える
幽霊たちだよ
ごっそりいるぜ
にぎやかにランチしてるぜ
生きていて幽霊なんだから世話ない
おっと　おれは生身だよ
足もある
それがしかしどんどん減ってるんだ
生身がよ
それこそかかあの足を確かめる始末だあね

町内会に十三軒入っているんだが
人がいなくなって
一人も子供がいないし
空き家が増えて
信用できる生身は五人もいない

幽霊の身だからなんとかしのげる
生身じゃ死ぬしかないよ
そんな話が聞こえる
なんかおかしな話だよな

生きるために
今を失くし
幽霊になっちまった
生きるための幽霊だぜ
仲の良かった働きもんの声が言っている
ところで
あんさんは幽霊かい

いやいや
昔の親友を探しているだけだ
逃げ出す
あいつを追うことはやめよう

生き続ける

夏草の背がのびて
公民館の旗がしおれて
梅雨が続いている

とっくに火葬された連中が
朝から何人も集まってきて
しゃがみこんでぶつぶつ言っている
トウモロコシの粒を分け合いながら
うちら終わったんですかね
違うと思うよ
どっちかというとうちらが終わらせたんじゃないか
時代とか
いくつもの闘争があって
賃金のことも
そのあとのことも
みんな考えたろ
国も政治も出来るこたあ戦争しかない
おっかないもんだ
もう充分だろうに
そして　そして　だ

うちらはここにいる
死に切っていない
近所付き合いもしている

仕事は会社なしでもする
大事なことは
水と食うもんよ
これはぜったい

どこにでも住めるが
大事なのはひとひとよ
一緒におればなんとかなる
ぼーめいも難民もいいが
考えて
考えて
用意しとかな
おかずなんかやり取りするぐらい近いとこに
いっぱい住まにゃならん

あとは用心
真面目なやつ
理屈ばっかりこねるやつ
こいつらはだましててっぽ（鉄砲）撃つけんなあ

歌い続ける

聞いてくれる人は少ない
木陰に寝そべり
歌い続ける
けっして
歌いあげない
ささげない
言葉のない歌
地を這っていく
波に乗っていく
海にのまれない
天にのぼらない
言葉のない歌

涅槃像

木綿の白いＴシャツに大きめの木綿の白いパンツ
横たわる
ひとも動物もやってこない

風が温く入ってくる
十二畳の床の広がり
菩提樹もない部屋

資本主義のはてしない抱擁
大きなむろにいれられ
空（から）読経が繰り返され

女ほとけたちがやってくるのを
待っている
痛みのような官能

女ほとけたちを待っていると
革命が服を脱ぎ
はだしの子供たちのように
土いじりをする
おむつを変えようマイベイビイ
死んで死んで死んで
もっと死んで
いのちを殺せなくなった資本主義
墓地に吹くものは
死んだ戦争
そののちの

風

あちこちで食事をしているぞ
乳房のあるほとけたち
あちこちでしょっちゅう見かける
生殖ほとけたち
ぼくはぼく自身を抜けていた
ぼくの限りがぼくを捨てた
静かな音が聞こえる
光のなかで
目のようなものが拍動している

ひきづってきたものが
秋めいた風に吹かれていった
手にはだれの指もなく
ただなにもなかった

見知らぬものが
招いている
誘っている
土からにじみだした水が
はじめての野を流れている

あす
はじめての店に入ると
見つけるかもしれない
知らなかったテーブル
はじめてのひとたちを

そうはいっても
食べるものは馴れたものがいい
酒はなじみのもの
姿は変えられないが
出会いははじめてだ

風の吹くところにいこう

終わりのようなものが
鏡を差し出した
ぼくを見る
ぼくに出会う

だれかが
生まれたての

すれすれの水平線に浮かぶ
雲や太陽や鳥たちを歌う
舟の歌も歌う

なににも属さない
偶然にそこにいるひとたち
車を不器用に操り
酒を舐めるようにのむ
おしゃべり好き
ジャンプする
海沿いを走る
風が吹く
風が吹いている
国がない
波に乗ろう
魚がとぶ
島の山羊が跳ねる
火を噴いている島がいくつも
太陽を飲み込んで海が揺れる

ぼくを動かずに見ているぼく
すべてが見える
これまで見たすべてを

ずっと見ている
みんな動いている
老いて
ぼくが
詩であるのか

戯和讃

たふたふの若いちち
汗匂う麹の金の漂い
夢の片淵をすべる手
砲声続く窓辺の運河
燃えて震えるこだち

祭の賑わいにまぎれ
ただただあるく老い
悔いの封はほどけて
追われる夜は果てず
妻や子や孫はどこだ

小豆餡の蕎麦の饅頭
薄い茶ひと息に喉に
揺らぎ止まぬからだ
目覚めてもおもい朝
筆の滴の墨のうすさ

立つ風を待つひるま
雲に包まれ浮かぶ空
天と地との間に漂い
痛みも安らぎもなく
夜と昼の隙間で眠る

氷雨
夜半の硬い雨の音
薄い藍色の服　獄舎
曳かれ
手錠をかけられ銃を持たされる
立たされる